信州大人文学部の頃

１年間の教養部を終え、専門の人文学部に進む。キャンパスも旭町から「あがたの森」に移る。当時の写真がないので、『松本市史』第 2 巻、歴史編Ⅳ現代、1997 年による。名大中央図書館は「地方史コーナー」が充実しており、長野県の市町村史も数多く並んでいる。写真上は松本駅から真っすぐに伸びる直線道路。道路を 1500 ㍍ほど進んだ突きあたりが「あがたの森」。遠くに美ヶ原の山並も見える。この道路をよく歩いたので、いまでも思い起こす。大学から駅前まで、デモ行進したことも。

写真中は駅からの途中にある市民会館。当時とは違う感じもするが、ここで入学式が行われた。もう一つ記憶に残るのが、市民会館で行われた「前進座」の公演である。アルバイト要員として、舞台などで手伝いをした。これも縁となり、演劇や舞台に興味を持つようになった。市民会館下の写真は懐かしき「あがたの森」キャンパス正面。いまは公園入口になっているが、人文学部正門であった。さらに前は旧制松本学校（旧制松高）だ。この正門が一部学生により、バリケードで封鎖され、長い間にわたりキャンパスに入れなかった。次回にレポートしよう。

その下の写真は、昨年 10 月に紹介した『資料集成 旧制高等学校全書』第 4 巻（1981 年）掲載「アルプスを望む松本高校校舎」、あがたの森の青春記念像「われらの青春ここにありき」だ。

こうした木造 2 階建て校舎で講義を受けたので、懐かしい思いがする。凍てつく信州松本の地であり、朝一番に教室に行って、薪ストーブを点火させるのに苦労した。煙にも悩まされた。

青春記念像近くに「思誠寮」があり、よく寮の友人を訪ねて、大鍋でつくる「インスタントラーメン」をご馳走になったものだ。ここは北杜夫『どくとるマンボウ青春記』の世界であり、松高生の生活を振り返ることができる。「春寂寥の洛陽に　昔を偲ぶ唐人の　傷める心今日は我----」という『春寂寥』などの歌を口ずさんだ。いまでも「嗚呼青春の歓喜より」という気持ちになってくる。

学部生になって、講義にも興味を持つようになる。経済や政治関係、ドイツ語の講義などは熱心に受講したと思う。教養時代の「引きこもり」読書が、学問への関心を高めたかもしれない。学問だけでなく、社会的な活動にも目覚めてくる。友人と講堂を借り、「松川事件」の映画上映会を行った。多くの人の前で、超緊張しながら初めて挨拶した。忘れられない「イベント」だ。その後、学生自治会の活動にも参加するようになる。

（2016 年 9 月 9 日）